



小学生＝「い組」「ろ組」「は組」「に組」
中学生＝「ほ組」「へ組」

ギャラリートーク

6つの事例

研修初日、休館日の東京国立近代美術館所蔵品ギャラリーで、小学生と中学生へのギャラリートークを行った。受講者はレジュメを参考にしつつ、興味のあるグループを自由に見学した。

今年は、前年までの受講者アンケートで多かった「複数のギャラリートークを見比べたい」という声に応え、地元の公立小学校にも参加を依頼して、1時間のトークを2回設定し、のべ8グループを準備した。しかし残念ながら、新型インフルエンザ発生のため中学校のひとつが参加できなくなり、急遽6グループに減らしての実践となった。

大人数の見学者に囲まれながらも頑張ってくれた小・中学生、急遽の計画変更に対応してくださった指導者の方々、引率の先生方、受講生のみなさんに協力を感じたい。

*「ねらい」は、トーカーが配布資料に記載したものを転記し、「活動の流れ」は記録係が執筆した。

怒ってる？ 笑ってる？

人体の部分や痕跡から、感情や思いを探る

対象者：筑波大学附属小学校 4年生 13名

トーカー：西村徳行（同校 教諭）

記録：神田 惟（東京国立近代美術館工芸課 インターン）

作品：高村光太郎《手》1918年頃 ＊ブロンズ

鬯光《眼のある風景》1938年 ＊油彩

草間彌生《冥界への道標》1976年 ＊ミクストメディア

時間：50分（13：10～14：00）

使用教材：アートカード

ねらい

「い組」では、子どもたちの見ることへの興味・関心を高めながら、創造的に鑑賞することの楽しさを十分に味わわせたいと考えています。具体的に表されていることの発見から、それをもとにさまざまな見方や考え方で関わり、自分の中にその作品についてのお話をつくり上げていく創造的な鑑賞活動へ。トークで扱う3つの作品には、人体の部分や痕跡は表現されていますが、感情を表す「顔」は表されていません。「この人、怒ってる？ 笑ってる？」お互いの発見したことや想像したことをもとに、その人物の感情や思いを探ってみたいと思います。（西村）

活動の流れ

1. アートカードで連想ゲーム（20分）

「い組」は実際に作品を見る前に、アートカードを用いた連想ゲームを行い、子どもたちの作品を見る力、表現力を高めた。子どもたちは「道」、「人間」、「食べ物」、「身体の一部」等、懸命に手持ちと場のカードを観察し、それらを繋ぐキーワードを考え、友達の意見を聞いていくうちに、あらゆる角度から作品を「見る」ことを学ぶ。

2. 展示室で（30分）

展示室に移動した後は、「身体の一部」をテーマに高村光太郎《手》、鬯光《眼のある風景》、ゴームリー《反映／思索》、草間彌生《冥界への道標》を中心にギャラリ



トークを行った。《手》では、実際に「手」の形を真似てみることで、「牢屋の中にいる絶望した年寄いた左利きの病気の男が助けを求めている」姿を思い描いた。また、《眼のある風景》を近くで、遠くで、寝そべって、逆さまで鑑賞することで、子どもたちは、単に「眼」だけでなく、涙、カバヤワニ、悲しみと喜び、明け方と夕方、といったさまざまなものが見えてくることに気づいた。（神田）



セットの内容
アートカード 65枚、建物カード 6枚、ルー
ルシート、作品リスト、教員用ガイドブック

アートカードについて

アートカードは、鑑賞学習のための教材です。場所を選ばず、誰でも簡単に始められ、しかも楽しく創造的な鑑賞学習をすることができます。

中には、作品カードが計 65 枚入っています。国立美術館 5 施設のコレクションから、子どもたちに人気の作品や、館を代表する名作などを各館 13 枚ずつバランスを見ながら選択しているため、西洋美術から工芸作品まで幅広いジャンルによるユニークなセットになっています。

カードには作者や作品名は記載されていないので、さまざまにイメージを広げることができます。説明書にある使い方以外にも自分たちで工夫して新しいゲームを考えたり、ワークシートを組み合わせたり、授業導入に使ったりと、学習の目的や時間にあわせて応用できます。美術館での鑑賞の事前授業や、先生の研修にも適しています。

遊びかたの例と、期待できる鑑賞の力

似たところを見つける「にたものつながりゲーム」

⇒色や形の特徴をとらえる力

質問によってカードをあてる「名探偵ゲーム」

⇒言葉による表現力や批評力

「カレンダーをつくろう」

⇒季節や自然の豊かさなどのイメージを広げる力

使用した先生の声

- ・「美術館への期待が高まり、行って実物を見てみたいと思うきっかけができました」（小学校教諭）
- ・「自分の見方や感じ方が人と違っても大事にされるので、どの児童も楽しみました」（小学校教諭）
- ・「『よく見てみるとすごい』『こんな見方があるのか』『気づかなかったことに気づけた』等の体験ができました。鑑賞の基本であると思われる、よく見る本質的なことへの導入に適していると思います」（中学校教諭）
- ・「付属のガイドブックのテキスト『アートカード遊びの意義』が、指導案をつくる際に非常に役に立ちました。書かれているとおり、生徒の「遊び」が「学習」に変わっていくところを、論理的に観察できました」（中学校教諭）

○申込方法

アートカードは、送料のみのご負担で貸し出しています。最寄りの国立美術館（巻末参照）に電話でお申し込みください。

二人三脚ギャラリートーク

学芸員のサポートを受けてトークする

対象者：筑波大学附属小学校 4年生 13名

トーカー：奥村高明（国立教育政策研究所 教育課程調査官）

サポーター：藏屋美香（東京国立近代美術館 美術課長）

記録：黒澤美子（東京国立近代美術館企画課 インターン）

作品：草間彌生《冥界への道標》1976年 ＊ミクストメディア

アントニー・ゴームリー《反映／思索》2000年 ＊銅鉄

リチャード・ロング《東京の石の線》1983年 ＊石

時間：50分（12：50～13：40）

ねらい

教師は子どもの話し合いを進めることは得意ですが、美術作品の知識や理解は充分ではありません。教材研究をしようにも、最新の資料や解釈を得ることが難しいうえに、方法でつまづくこともあります。

一方学芸員は、美術作品に関する知識は豊富ですが、子どもの発達に応じて話を進めたり、まとめたりすることは専門外です。

そこで、先生が学芸員と協力しながら進めるギャラリートークを行ってみたいと思います。（奥村）

活動の流れ

1. 《冥界への道標》

トーカー：「これはなんだと思う？」

児童：「しっば」、「石」「靴がささってる」、「ぎっと誰かが河原で靴を脱いだんだ」

サポーター：「じゃあ靴を脱いでどこに行っただのかな？」

児童：「（右左を指して）こっち！」、「お芋ほりに出かけた」

トーカー：「作品の周りに広がっているものも見たんだね」

＊空間的の広がり注目

2. 《反映／思索》

トーカー：「この2人は同じ人？」

児童：「朝と夜で性格が変わる同じ人」、「互いを思索している」、「もう1人の自分を見てる」

トーカー：「中の人の色は…（児童と一緒に）明るい。」



外の人は…暗い。何で色が違うんだろう」

サポーター：「一方には錆びちゃった部分があるけど…

鏡の中の自分が変わっていつちゃったらどう？」

児童：「むなしい」、「怖くて見たくないから、この2人は目も口も閉じているのかも」

＊時間的の広がり注目

3. 《東京の石の線》

サポーター：「寝転んでもいいよ」

児童：寝転がりながら「石と石の間が道に見える」

トーカー：「名前をつけてみようか」

児童：「滅亡した街」、「何百年後かの地球」、「先じゃなくて、前じゃない？ 昔の風景」

＊作品のもつ空間、時間の広がり自由想像

（黒澤）



事後のコメント

奥村高明（トーカー）

つないだり、まとめたり

「子どもと作品が循環するように遊ぶこと」が大事だと思っている。もちろん安全への配慮、進行、作品の選定、切り上げる判断などは教師の仕事である。これをふまえた上で子どもたちと鑑賞を楽しんだ。3作品目までは、全員で作品を選びながら鑑賞した。私は子どもの意見を聞き、それを作品や友達の意見とつないだり、子どもの言葉でまとめたりしながら進めた。困ったときは藏屋学芸員に助けを求めた。すると「寝っ転がって見てごらん」のように見る方向だけを示唆してくれた。それは作品という知識に届かせるのではなく、深い作品への理解から導き出された〈子どもたちを遊ばせる方法〉の提案だった。子どもたちは面白いように鑑賞の能力を高めていった。もう4作品目は全員で鑑賞する必要を感じなかった。そこでばらばらになって自分たちが見たい作品を鑑賞することにした。子どもたちは、見る高さや距離を変えたり、友達と話し合ったり、キャプションを見たりしながら自在に鑑賞していた。心から楽しかった。子どもと藏屋学芸員と作品たちに感謝している。



藏屋美香（サポーター）

学校とはまた違う子どもたちの姿を

《冥界への道標》では、①作品面に貼り付けられた靴を見つけること、②靴から履いていた人のようすを想像すること、③作品面が地面に見立てられており、作品を壁に掛けることによって、水平なはずの地面が垂直に90度回転させられていること、つまり靴を履いていた人たちが今ここにいるとすれば、壁から横に生えているように見えるはずだということ、を理解してもおおうと考えたが、③は概念的過ぎたためか、うまく伝わらなかった。子どもの理解に合わせた問いかけをするノウハウに欠けていたと感じている。こうした点は、先生と学芸員の事前の話し合いによって、最適解が得られると思う。

逆に《反映／思索》は、高度な哲学的概念を扱う作品にもかかわらず、意見が活発に出た。抽象度が高くても、子どもの問題意識——この場合、「自分とは何者か」「自分や他者の目に自分はどうか映るのか」という問い——に合致し、意見が豊富に出る場合、思い切って対話を深めるべきだと感じた。例えばこうした場面で、先生方が、学校とはまた違う子どもたちの姿を見出してくださるなら、美術館としてもやりがいがある。

藏屋美香（東京国立近代美術館 美術課長）

千葉大学大学院修了後、1992年より東京国立近代美術館に勤務。展覧会の企画等を行う。最近の企画に「ヴィデオを待ちながら——映像、60年代から今日へ」、「寝るひと・立つひと・もたれるひと」がある。



あなたは何を見ているの？

「見る」を深める「問いの一撃」を探る

対象者：筑波大学付属小学校 4年生 12名
トーカー：柴崎 裕（多摩市立多摩第三小学校 教諭）
記録：岸田陽子（東京国立近代美術館工芸課 インターン）
作品：原田直次郎《騎龍観音》1890年 ＊油彩（護国寺蔵）
古賀春江《海》1929年 ＊油彩
時間：50分（13：00～13：50）

ねらい

対象作品の2点には、それぞれ視線を投げかける登場人物がいます。多くの人が見守るトークでも、自然に子どもたちのまなざしは、それらの「視線の行方」＝「あなたは何を見ているの？」へと、導かれることになるでしょう。その「視線の行方」をめぐることから、「わたしは何を見ているの？」というひとりひとりの旅の扉が開くよう…「問いの一撃」を探りたいと思います。（柴崎）

活動の流れ

1. 《騎龍観音》

いろいろな位置から眺めた後、気づいたことの指摘からトークを始めた。「龍の横に尖った爪が見える」などの意見が出され、それぞれの意見に対し、見えない4つ目の手足が観音の背後にある、といった想像も自由に述べられた。

額縁にお寺のマークが付いているという観察に対しては、実際に寺に置かれていたという絵の来歴をトーカーが教えた。

龍の動きを問われて、1人の子どもが体を使って示してみせ、観音が何を見ているかという質問には、下にいる人々を見てパトロールしているといった声が上がった。

まとめとして画中の観音になってみてと提案され、1人が「世界は大丈夫だろうか」とポーズを決めて観音の真似をした。



2. 《海》

ここでも同様に気づいた点への意見から次第に絵への理解を深めた。朝と夕方や夏と冬、時代の違うものがひとつの空間に描かれている、という矛盾した要素が指摘されていた。絵の人物になりきった子どもは「カモメに餌あげますから！」と声をあげた。最後にトーカーが、いろんな謎が絵には隠れている、画中の人物が何を考えているのか、これからも考えてほしいとまとめた。（岸田）

「何？」から始まる鑑賞

想像をふくらませて、新たな世界を創造する

対象者：千代田区立九段小学校 4年生 13名

トーカー：寺島洋子（国立西洋美術館学芸課 主任研究員）

記録：菅野仁美（東京国立近代美術館企画課 インターン）

作品：草間彌生《冥界への道標》1976年 ＊ミクストメディア

白髪一雄《天慧星拚命三郎（水滸伝豪傑の内）》1964年

使用教材：アートカード、 ＊油彩

大月ヒロ子『コレでなににする？』福音館書店

時間：50分（14：10～15：00）

ねらい

注意深く見ること、考えることを大切にトークです。今回は、見る者を引き込むような大きい抽象作品との出会いを楽しみます。目で見るだけでなく、体を動かしながら感じたこと、発見したことを、簡単な言葉にしてみみんなで共有します。それらをもとに、考えを深めたり、広げたりして、作品から想像をふくらませていきます。子どもたちは2点の作品からそれぞれどのような世界を創造するでしょうか。（寺島）

活動の流れ

1. 導入

自己紹介を兼ねて今日の気分を表すアートカードを1枚選び、理由を発表。

2. 《冥界への道標》（25分）

よくみた後、〈刺さっている感じ〉など気になったことを自由に発言。

トーカー：靴に注目し、「人はどうしたのかな？」

児童：「本当はある」、「黒いのが出てきたから逃げた」

トーカー：「いろいろな風に見たけれど、どんな気分？」

児童：「不気味」、「静か」

トーカー：「自分だったらどんな題名をつける？」

児童：「靴と闇の絵」、「足が痛い」



3. 《天慧星拚命三郎》（25分）

前の作品との相違点・共通点を発言し合う中、子どもたちの間から「地獄の蛇」「深み」などの題名が提案された。

トーカー：「みんながこれを描くとしたら何でどうやって描く？」

児童：「ペンキ」、「手」、引っ掻くような仕草、「勢いで描いているようだが）頭を使っている」

4. 発表（5分）

最後に今日見た2作品の内、好きな作品とその理由を1人ずつ発表。絵本『コレでなににする？』の紹介。白髪氏が足で制作する写真を見る。

トーカー：「本当はもっといろいろなことが背景にあるかもしれないね」（菅野）

鑑賞の切り口を考えながら

生徒の主体的な鑑賞の能力を生かした
鑑賞活動への挑戦

対象者：埼玉大学教育学部附属中学校 1、3年生 7名
トーカー：三澤一実（武蔵野美術大学 教授）
記録：三石恵莉（東京国立近代美術館工芸課 インターン）
作品：柳原義達《犬の唄》1961年 ＊ブロンズ
岡本太郎《夜明け》1948年 ＊油彩
時間：50分（14：00～14：50）

ねらい

鑑賞活動を生徒の主体的活動にしていくためには、多様な鑑賞の視点を生徒自身が獲得していくことが必要です。今回は、彫刻作品と絵画作品を取り上げ、どのような見方をしたら鑑賞が楽しめるか、生徒自身が鑑賞の方法のアイデアを出し、皆でその方法を試してみます。そして、感じたことを話し合いながら、それぞれの鑑賞を深めていくことに挑戦してみたいと思います。（三澤）

活動の流れ

1. 《犬の唄》

トーカー：「何に見える？」

生徒：「妊婦」、「何かを抱いた人」

トーカー：「どう見たらおもしろいかを考えたいと思います」

生徒：「同じポーズをとってみたら？」

（見方の提案→みんなでポーズをとる）

トーカー：「どんな気持ち？ この姿勢は楽かな？」

生徒：「楽じゃない」、「無理している」、「どこかが痛くて手を握っている？」

いろいろな角度から鑑賞→2、3人に分かれて相談

生徒：「（左手は）痛い時の握り方じゃない。何かを掴んでいるのかも」

（再度ポーズ→それぞれの考えを発表）



2. 《夜明け》

（絵の前に座って意見交換→議論を深める）

生徒：「色がすごい」、「迫力がある」、「恐ろしい」

トーカー：「この世界で何が起きているのかな？」

生徒：「山の向こうが赤い」、「こわい、より楽しい」

「最初は暗いと思ったけど、段々見方が変わってきた」

3. まとめ

トーカー：「いろいろ考えてみただけで、こたえは出てこないよね。今日みた2つの作品を読み解く鍵は、この部屋の展示作品たち。この後の見学で、自分が感じた“何だろう”“ふしぎ”を糸口にもっと鑑賞を深めてください」（三石）

みるみるよむよむ

作品に込められた意味を思考ならぬ視考する

対象者：埼玉大学教育学部附属中学校 美術部 8名
トーカー：山田一文（同校 教諭）
記録：福永 愛（東京国立近代美術館工芸課 インターン）
作品：北脇 昇《最も静かなる時》1937年 ＊油彩
田中信太郎の作品と空間 ＊金属など
時間：50分（14：00～14：50）

ねらい

取り上げる作品は、それぞれが比較的シンプルなもので、直接具体的な何かを表しているものではありません。しかし、みるみる（よく見る）と、作者が気を遣ったところ、何かを仕掛けたところが見えてきます。はたしてその特徴からはどんなことが、よむよむ（読み取り）できるのか。みんなの力を合わせて取り組みたいと思います。（山田）

活動の流れ

1. 《最も静かなる時》

自分と仲間がみたことを総合してみる『みるみる』と、作品の空気と中身を総合してよむ『よむよむ』の説明を受けてから作品と向きあった生徒たち。

北脇の作品に対する「暗い感じ」「木の先が人の手のよう」「落ち葉は女の人の心」といった初見の感想が共有された後、トーカーから北脇が作品に用いる「見立て」の手法が紹介された。

ヒントも踏まえ何が象徴されているかが話し合わせ、太平洋戦争直前の制作年に注目した生徒からは手の形に見える木は光を求めているのではないか、という意見も出た。

2. 田中信太郎の作品と空間

作者の意図がわかりにくいといった意見と同時に、《無域》の単純に見える十字が実は円柱、三角柱、四角柱で構成されたものである、などの発見が発表された。



トーカーからは作者の「意味のある所に意味は無い。意味の無いところに意味は生まれる」という言葉等、作品を読み解くヒントが紹介され、生徒たちは離れたりと、近づいたり、匂いをかいでみたりして再度作品を『みるみる』した。鉛の作品（《鉛の胎児》）に対し「割ったら何か入っているのでは」という意見も出され、視考の深まりを感じさせた。（福永）

※ 視考は、視て考えるという意味の造語。

受講者アンケート (ギャラリートーク)

	回答に満足	満足	普通	やや不満	不満	無回答		+満足計	+不満計
TOTAL	124	33.1	47.6	11.3	6.9	2.4		80.7%	8.6%
小学校教諭	46	39.1	45.7	3.7	2.2	4.9		84.8%	2.2%
中学校教諭	48	22.9	56.3	14.6	4.2			81.2%	4.2%
学芸員	20	45.0	20.0	15.0	10.0	10.0		65.0%	20.0%
指導主事	10	30.0	60.0					90.0%	0.0%

受講者感想 (抜粋)

小学校教諭

答えはひとりひとりの心に

みることの楽しさを実感できる学習を具体的にみせていただいた。答えはひとりひとりの心にあるということをあらためて感じることができた。発達に応じた作品選びのポイントをもう少し詳しく知りたい。

アートカードは予想以上

「い組」を見学した。アートカードに興味があったので、導入でアートカードにふれ、次に実物を見ることが子どもたちにどう影響するのか楽しみだった。結果は予想以上に子どもたちが作品に関わるようになり、自分なりの考えを自由に発言する様子が素晴らしかった。

ぜひ実践したい

生の姿を見ることができたので、非常に面白かった。ぜひ受け持ちの子どもたちを引率して、ギャラリートークを実践したいと感じた。

話しかけ方、問いかけ方が参考に

トーカーの柔らかな話しかけで、児童が素直に自分の言葉で話していた。基本となりそうな話しかけ方、問いかけ方が参考になった。

教師の関わり方がよくわかった

ギャラリートークを実際に行う場合、どんな風にやればよいのか見ることができてよかった。子どもの様子もさることながら、教師がどのように関わっていけばよいかがよくわかった。

安心して実践できそう

内容や流れを理解できた。現場に帰っても安心して実践できそうだ。

中学校教諭

鑑賞が広がっていく様子が

私たちにもすぐ実践できる内容でとてもよかった。丁寧に子どもたちの言葉を拾い上げ、みんなで共有することで子どもたちの鑑賞が広がっていく様子がみてとれた。

どの発言にスポットを当てるか

特に、子どもの発言から次の段階へと進めていかれる場面では、発言を全て受け入れとても自然な流れに見えるのだけれども指導者がねらいをしっかりふまえた上で、どの発言にスポットを当てるかがとても大きいと感じた。

子どもたちに寄り添う姿勢

小学生たちの反応はとてもものびしていて、指導者のスタンスもその子どもたちの「間」に自然にとけ込んでいると感じられた。指導者の子どもたちに寄りそう姿勢を学ぶことができたと思う。

「発見していく」ことがキーワード

指導者が、子どもたちとかなり近い感じで作品をみて発問をしていることに驚いた。「教えこむ」というより「発見していく」ことがキーワードなのかなと思った。

少し変えて実践してみたい

ギャラリートークそれぞれのテーマが明確で、参観しやすかった。日頃、見ることのできない小学生の鑑賞活動の様子を見られて、大変よかった。中学生の方は、最後のまとめの部分につなげるところをもう少し変えて実践してみたいと思った。

学芸員

自信にもなった

それぞれの指導者の個性がでていて、絶対にこうでなければならぬ、ではないことがよくわかった。とても勉強になり自信にもなった。

まだ何かあるのではないかな？

自由に作品を見る行為は十分であったが、そのこと＝(イコール)鑑賞なのかと考えると、まだ何かあるのではないかな？

空気の変化に注目

「に組」は声が小さく聞こえづらかったが、かえてグループの空気の変化に注目することができた。

指導主事

教師の役割について

こうした生の姿をみせてくださってとてもありがたかった。ギャラリートークの教師の役割について深く考えることができた。

援助する姿勢の大切さ

「ろ組」はトーカーとサポーターが2人で進んでいた。子どもの思いを引き出し、子どもを前面に出した鑑賞がとても印象的。大人が余分なことを言わず、援助する姿勢の大切さを学んだ。

ぜひ勤務館でも取り入れたい

子どもたちのつぶやきをいかに拾っていくか、トーカーの発問とその表情が大変参考になった。「ろ組」の学芸員とのかけあいによるトークは、新鮮だったので、是非、勤務館でも取り入れてみたい。